

アメリカ公立図書館と開架制論議（1890年代）

川崎 良孝

はじめに

筆者は「アメリカ公立図書館と開架制：開架制導入前史」で、1890年以前のアメリカ公立図書館は開架制に否定的であったことを示した。また「アメリカ大都市公立図書館での開架制の導入：クリーヴランドとミネアポリスを中心として」において、大都市公立図書館での開架制を実践したクリーヴランドとミネアポリスについて詳述した⁽¹⁾。前者は1890年、後者は1889年に開架制を開始した。しかしながら開架制を平面図も添えて『ライブラリー・ジャーナル』に掲載したのはクリーヴランドが先であった。この記事が開架制論議を本格化させることになる。本稿はアメリカ図書館協会年次大会での報告や論議、『ライブラリー・ジャーナル』での論考を取り上げ、1890年代の開架制の内容および論議の帰趨を明らかにする。

1 1890年：クリーヴランド公立図書館の影響

1.1 『ライブラリー・ジャーナル』の開架制調査

1890年5月号の『ライブラリー・ジャーナル』に掲載されたクリーヴランド公立図書館長ウィリアム・H. ブレット（William H. Brett）の報告は影響力があった⁽²⁾。ここでは平面図を用いて全面開架の構想と実践を伝えていた。この報告に刺激されて、『ライブラリー・ジャーナル』編集部は書架へのアクセスについて主要な図書館に問い合わせ結果を報告した。本稿では公立図書館および私的な管理運営であっても公費が補助され、住民が貸出を利用できる図書館を紹介する。まず1890年7月号の『ライブラリー・ジャーナル』に掲載された回答を取り上げる⁽³⁾。ニュージャージー州ニューアーク公立図書館長フランク・P. ヒル（Frank P. Hill）の回答によると、公立図書館の第1の義務は利用者にたいしてであり、利用者を助ける事柄はすべて図書館を利する。したがって利用者が上手に図書を利用するなら、開架制に問題はない。同館は蔵書20,000冊のうち1,000冊を参考室に配置し、利用者は自由に手にできる。近い将来、科学書や歴史書

についても利用者がブラウジングできるようにしたいし、他の主題の本にも拡大したい。書架へアクセスする自由をどこまで拡大するのは論争になっている。確実に言えることは、参考部門の図書の自由な利用、それに優秀な職員の手助けが、書架への自由なアクセスと同程度に好ましいということである。

ブルックリン図書館のW. A. バードウェル (W. A. Birdwell) は、少数の学徒にはアルコール内での調査研究を許しているが、それは最小限に留めるべきと回答した。続けて開架に反対する理由を指摘した。まず情報の入手については、参考室、目録、職員の助けによる方が効率が良い。次に書架の乱れが生じ、目録を利用して請求された本が所定の位置になく、サービス低下が生じる。また不心得者による盗本が増加する。さらに仮に500人が入館し、その内400人が書架を動き回れば、混乱と書架の乱れが生じる。これに対処するには書架整理の職員を雇う必要がある。また数百名の利用者が書架に押しかけては業務遂行の妨げになるし、利用者のためにもならない。

最後にデトロイト公立図書館長ヘンリー・M. アトリー (Henry M. Utley) の回答である。同館の場合、芸術と特許のアルコールでは資料を直接手にすることができる。他の書架にアクセスするには、目的と主題、そして多くの図書を参照する必要があることを示さねばならない。許可を得ると当日だけ書架にアクセスできる。取り出した本を書架に戻してはならず、返却用の棚に置き、職員が書架に戻す。アトリーは書架の正しい位置に図書に戻す利用者は100人に1人と述べた。また書架に多くの利用者が入ると、図書館職員の業務遂行を妨げると答えた。

『ライブラリー・ジャーナル』は翌8月号でも開架制調査の第2部を掲載した⁽⁴⁾。マサチューセッツ州ウースター (Worcester) 公立図書館長サミュエル・S. グリーン (Samuel S. Green) は、将来的にはともかく、現状では利用者が自由に書架にアクセスできる状況にないと判断していた。そしてクリーヴランドの実験を注視していると述べた。グリーンは参考部門について、利用者への監視を続けられないなら、アクセスの自由に真の危険が生じるとした。これは盗本を意味していた。また学徒に書架へのアクセスを許す場合、職員の付き添いを主張した。グリーンの結論は、現状の一般的な公立図書館の建物や備品の状況では、「当然ながら公立図書館貸出部門の書架への自由なアクセスは現実的でない」⁽⁵⁾というものであった。

続いてハーバート・パトナム (Herbert Putnam) 館長のミネアポリス公立図書館である。同館では調査研究を目指す利用者には書架 (書庫) への自由なアクセスを認め、有効期間最長1年の入庫許可証を発行している。許可証はフィクション、児童書、貴重書などには適用されない。書庫のアルコールには机や椅子を備えている。また目録では満足した本を探せない一般利用者を書架 (書庫) に案内し、自分で図書を選ぶようにさせている。要求があればすべての利用者が書架にアクセスできる。書架から取り出した

本は元に戻さず、職員が本を集めて定位置に戻す。図書館は開館して8か月にすぎないものの特段の問題はない。1年間に数百ドル分の図書が紛失しても、100人の利用者の内99人の正直な利用者にとっては明確な利益があり、開架制を棄てることはない。

マサチューセッツ州セイラム（Salem）公立図書館は貸出部門の書架へのアクセスを一切認めていなかった。税で支えられている公立図書館にあって、一部の利用者だけに書架へのアクセスを認めるのは賢明でないと考えていた。一方、コネティカット州ニューヘイヴン（New Haven）公立図書館はフィクションを除いて書架へのアクセスを許していた。貸出冊数は月に10,000冊を超えているので、フィクションを開架にすると不都合が生じるという。

さらに『ライブラリー・ジャーナル』は10月号でも3回目の調査結果を報じた⁽⁶⁾。クリーヴランド公立図書館はブレット館長が回答している。フィクションを除いて、貸出部門の図書はアルコーヴのガラス扉の書架に入っており、通常は施錠されている。利用者はアルコーヴに自由にアクセスでき、職員に告げればガラス扉が開かれ、図書を選択できる。アルコーヴには閲覧机があり、職員も常駐している。この方式は特に勉強好きの利用者の好評を得ている。書架の乱れは大きな問題になっていない。貸出冊数は40パーセント増加し、増加率は閉架のフィクションよりも開架の図書で目立っている。

なお公立図書館ではないがフィラデルフィア徒弟図書館の場合、アルコーヴの前に鉄製柵を設け、いくつかの入口からアルコーヴに入れるようになっていた。年間貸出数は96,436冊で、概してこの入口の扉は開放されていた。しかし午後5時30分から6時30分までは職員が忙しく、アルコーヴ内に利用者があると業務効率が落ちるので、この時間には柵を閉めている。柵を閉める唯一の理由は混雑と職員の業務効率である。

1.2 1890年フェービアンズ年次大会とホズマー

1890年のアメリカ図書館協会年次大会は9月上旬にニューハンプシャー州フェービアンズ（Fabyans）で開催された。この大会では開架制に的を絞った報告はなかったが、いくつかの発表が開架制に言及している。まずプロヴィデンス（Providence）公立図書館長ウィリアム・E.フォスター（William E. Foster）は、「今後、利用者による書架への自由なアクセスは、たとえ大きな図書館であっても間違いなく増大する」⁽⁷⁾と断言し、開架制の前提として主題分類の必要性を確認した。アマースト（Amherst）・カレッジの図書館長ウィリアム・I.フレッチャー（William I. Fletcher）は、当時は換気や室温とともに重大な関心事であった照明について報告し、開架制の動向も館内の照明に影響すると強調した⁽⁸⁾。

また大会ではワシントン大学教授ジェームズ・K.ホズマー（James K. Hosmer）が図書館利用経験を発表した⁽⁹⁾。ホズマーはパットナムの後継館長として、1892年から

1904年までミネアポリスの館長を勤める。報告では大英博物館の大閲覧室での利用経験を述べ、同館が参考図書の意味を広義に解釈して、多くの図書を直接手に触れるようにしていることを絶賛した。続いてアメリカ大都市公立図書館を3つ匿名で取り上げた。まず閉架制の大きな図書館で、図書請求の時間と労力の浪費、それに適切な図書を入手できない苛立ちを報告した。第2は施錠されたガラス扉を通して図書の背が見えるという図書館であった。最後は人口20万の市に最近になって建設された図書館である⁽¹⁰⁾。この図書館では真面目な目的を持っていれば、書庫に入り自由にブラウジングできる。広大な明るい部屋（書庫）にアルコーヴが設けられて書架が置かれ、机、椅子、筆記用具がある。アルコーヴの入り口に柵はなく、書架にガラス扉もない。取り出した本は書架に戻さず、机に置き、職員が書架の所定の位置に戻す。館長は閉架によって何の不都合も生じていないと断言したという。ホズマーが取り上げた最初の図書館はボストン、2番目はクリーヴランド、最後は1889年開館のミネアポリスと推察できる（なお1890年のミネアポリスの人口は165,000人）。このホズマーの発表は明らかにクリーヴランドよりもミネアポリスを評価していた。

1890年の『ライブラリー・ジャーナル』の調査結果をみると、クリーヴランドとミネアポリスに加えて、ニューヘイヴンだけが大規模な開架を試みていた。その他の館は消極的で、はっきりと開架を拒否する館もあった。消極的な回答を寄せた館の館長は、ヒル（ニューアーク、1905-06年アメリカ図書館協会会長）、アトリー（デトロイト、1894-95年会長）、グリーン（ウースター、1891年会長）など公立図書館界を代表する人物であった。またクリーヴランド、ニューヘイヴンにしても、フィクションを開架にしてはいなかった。

2 1891年：アメリカ図書館協会年次大会でのブレット、パットナムの主張

2.1 ミネアポリス公立図書館における開架制の紹介

1891年6月号の『ライブラリー・ジャーナル』は、1889年12月に開館したミネアポリス公立図書館の建物と館内配置を、外観写真や1階平面図も入れて詳しく紹介した⁽¹¹⁾。と同時に同じ号で同館年報から開架制の部分を抜粋して掲載した⁽¹²⁾。同年報はアメリカ公立図書館で最も自由な開架制を自負するとともに、紛失本は非常に少ないと報じていた。この2つの記事によってミネアポリスの開架制が注目されることになった。ミネアポリスの開館は1889年、クリーヴランドは1900年であるが、開架制として最も注目を浴びたのは後発のクリーヴランドである。確かに両者を比べた場合、クリーヴランドの開架の方が革新的であった。それとともに『ライブラリー・ジャーナル』への報告が、クリーヴランド1890年5月、ミネアポリス1891年6月と、クリーヴランドの方が1年早かつ

たことが影響していると思われる。

2.2 州レベルでの開架制論議の開始とトマス・W. ヒギンソン

1891年になると州レベルでの図書館団体の大会でも開架制が取り上げられるようになった。1891年4月、マサチューセッツ図書館クラブ（同州図書館協会の前身で1890年10月に結成）の第3回会議が新しく増築したウースター公立図書館で開催された⁽¹³⁾。この会議でケンブリッジ（Cambridge）公立図書館理事トマス・W. ヒギンソン（Thomas W. Higginson）は講演を依頼された。ヒギンソンは1890年5月の『ハーパーズ・バザール』に、ポータケット（Pawtucket）やクリーヴランドの開架制を支持する記事を執筆した人物である⁽¹⁴⁾。講演では4つの公立図書館での理事経験に触れた後、開架制に焦点を当てた。さらに同クラブは1891年7月に第4回会議をスプリングフィールド（Springfield）で開催した⁽¹⁵⁾。会長チャールズ・A. カッター（Charles A. Cutter）は開架制を課題として取り上げ、ブルックライン（Brookline）公立図書館理事チャールズ・C. ソール（Charles C. Soule）に発言を求め、ソールは熱心に開架制を支持した。ソールは開架制について、管理と利用の両面から検討すべきと主張した。管理面からみると無秩序という懸念があるものの、書架の乱れは利用者が図書を書架に戻さないことで一定の対処が可能である。また利用者が自由に図書を選ぶことで、職員の時間節約になる。利用者にとって開架制の利点は非常に大きい。来館者は欲しい本について漠然としている場合が多い。この場合、目録は助けにならず、直接に書架と対面するのがよい。とはいえ、いっそう重要なのは開架の教育的役割で、開架によって読書の水準が上昇する。そしてソールは、クリーヴランドとミネアポリスの実験を紹介し、さらに開架制はとりわけ小規模図書館で実現性があると結んだ。これは小規模の独立した公立図書館が圧倒的に多いマサチューセッツ州の図書館状況を意識しての言及であったろう。

ソールの講演について同クラブ副会長でスプリングフィールド公立図書館長ウィリアム・ライス（William Rice）は、10年以上にわたって開架制を導入してきたが、必ずしも成功しなかったと述べた。この時期に蔵書は5,000冊から25,000冊に増加し、特に問題になったのは児童とフィクションのアルコールで、忙しい日には無秩序が生じたという。ソールは漠然とした利用者は開架によって本を選択できると好意的に解釈したが、ライスはそうした利用者は書架を歩き回るだけだと切って捨てた。スプリングフィールドは特別な研究主題を持つ利用者だけに書架へのアクセスを許していた。また200冊から300冊の新作図書は出納カウンターに置き、利用者は自由に手に取って借り出せる。この措置によって利用者の読書の質が向上したという。開架制に断固として反対する参加者もいた。そしてクリーヴランドの開架制にしても、図書はガラス扉で施錠された書架の中にあると指摘した。会長カッターは議論を終えるに際して、大英図書館は40,000

冊を開架にし、ボストン・アセニウムも開架であるが、書架の乱れから問題は生じていないとまとめている。カッターの言は開架制支持を示唆していた。

興味あることだが、既述の1891年4月のマサチューセッツ図書館クラブでのヒギンソンの講演について、9月号の『ライブラリー・ジャーナル』は開架に関する部分を抜き出し、「書架へのアクセス」との題名で掲載した⁽¹⁶⁾。ヒギンソンは図書館の歴史を踏まえて、図書館は資料収集から資料提供に関心が移行していると分析した。また盗本などへの懸念と書架への自由なアクセスについては、「カレッジの学生やボストン・アセニアムの株主は選抜され、一般民衆は信頼できない」⁽¹⁷⁾とは言えないと述べた。というのは図書を盗むのは、書齋に置きたいと願う教育ある図書収集家、情報の独占を求める専門家で、図書館員はこの見解に合意するだろうと話しかけた。そして今後は、公立図書館の正当な所有者である住民が自由に図書を扱う方向に展開していくと予測した。それには図書館員や図書館理事が抱く多くの偏見をなくす必要がある。施錠をなくし、少額の金銭的損失は利用者の増大で十分に埋め合わされると認識し、建物自体を大きく変えなくてはならないと訴えかけた。自館のケンブリッジ公立図書館については、参考部門に2,000冊を開架にして、12歳以上なら誰もが手にすることが可能で、1冊を除いては紛失も損傷もないと報告した。そしてこの2,000冊には事典や辞書のみならず、スコット、アーヴィング、サッカレーの小説なども入っていると述べた。また建物を見直す機会があれば、最大限に開架制を導入したいと期待を表明し、クリーヴランドが示すように経費や職員の増大なしに開架制が導入できると信じていると結論した。

『ライブラリー・ジャーナル』の編集長チャールズ・A.カッターは、ヒギンソンの論考を掲載するに際して次のように説明している⁽¹⁸⁾。きたるサンフランシスコ年次大会では書架へのアクセスが主題になるので、ヒギンソン論文は大会での論議に役立つ。ヒギンソンが賞賛した開架制の擁護者が大会では報告者となる。そして編集長は、「書架へのアクセスには大きな価値があり、一定の時間と資金を犠牲にするに値する。この広く行き渡っている確信、十分な証拠で固められている確信を、妨げることはできない」と結論した。実のところカッターは1888年のアメリカ図書館協会年次大会で開架制に疑問を提出し、自殺行為とさえみなしていた⁽¹⁹⁾。それが3年後には上述のような考えに変化していた。これは単にカッターだけの变化ではなく、公立図書館界全体の変化を象徴するものであった。

2.3 サンフランシスコ年次大会とブレット、パットナム

編集長カッターは「開架制の擁護者が大会では報告者」になると指摘していた。1891年10月中旬にサンフランシスコで開催されたアメリカ図書館協会年次大会で報告したのは、まさにクリーヴランドのブレットとミネアポリスのパットナムであった。ブレット

の報告は⁽²⁰⁾、紛失本はごく少数で閉架の時と変わらず、書架の乱れについては利用者に図書を書架に戻さないように求めているが問題とするほどではないと話した。ブレットは頻繁に指摘される盗本と書架の乱れについて、実践によって結果を示したことになる。一方、開架制の利点である。まず利用者への図書館の価値を大いに高める。特に読みたい本が漠然としている利用者については、職員が適切な書架に案内できる。次に貸出冊数の大幅増加である。第3に貸出部門を閲覧室や研究室として用いる利用者も多い。第4に経済的な利点で、ブレットは正確な数値を示すことは困難としつつ、貸出1冊当たりのコストが3分の2に低減していると報告した。このような諸点を指摘して、クリーヴランドの実験を成功と結論した。なおブレットは開架制導入の前提を2点に絞って確認している。まず監督が経済的にできる明るくて便利な部屋やアルコールヴである。次に書架上の図書が体系的かつ詳細に分類されていることである。また目録の価値は開架によって低下せず、図書の所蔵の有無の確認などに欠かせないとした。

いま1人の発表者パットナムは長文の報告を行った⁽²¹⁾。書架の乱れについては、書架から取り出した本を書架に戻さないようにすればよいと主張した。次に目録の活用で十分という意見には、目録は一定の教育を前提にしているという理由で拒否した。パットナムはサービス対象者を区分した。まず読書への希望や欲求を持たない人である。概して教育のない利用者は目録を恐れており、閉架制はまさにこうした人びとを遠ざけているのだが、図書との直接的な接触を可能にする開架制は読書への励みになると述べた。第2に読書が固定している人である。こうした人は数名の作家の本に集中し、図書館員が読書の幅を広げようとしても拒否する。しかし書架へのアクセスを自由にすれば10人に1人は新しい著者の本も選択するし、目録から選ぶよりも良質の図書を選ぶ。第3の範疇は、読書の水準が図書館の水準よりも低いので、来館しても希望する図書を入手できず、一般の人（*people*）の求める本がないと不満を持つ利用者である。パットナムの主張によると、こうした人は開架制になると常連利用者になる。開架に導けば、当人の求めている本を図書館が所蔵していなくても、他の本を読むようになるという。最後に勉学のための利用者だが、パットナムによると改めて開架の効用を説明する必要はないとのことであった。

続いてパットナムはミネアポリスの実践を確認した。ミネアポリスは利用者が求めさえすれば、ほぼ無条件に利用者に書架へのアクセスを認めていた。それでも「書架に入る許可を授けるといふ意図を広く知らせても、申し込みに気後れする利用者」⁽²²⁾がいたという。それに来館ごとに繰り返し許可を求めるのを嫌う利用者もいた。そこで利用者で混雑しない時には、「この時間、自由に書庫に入り、図書を選んでください」という掲示を、貸出デスクの前に掲げた。夏期にこの掲示を出した時、図書館利用は50パーセント増加したという。そして皮肉なことに大成功がために、無条件の開架の時間を削ら

なくてはならなかった⁽²³⁾。

パットナムは利用者のグループ化と開架の利点、ミネアポリスでの実情を示したのち、(1)盗本や切除の実態、(2)書架の乱れと図書出納業務への影響、(3)利用される図書の増加や質の向上を取り上げた。まず盗本は1年半で25冊、雑誌はその倍で、金額に直すと50ドルを超えない。重大な切除は1件である。(2)に関しては、混雑時に利用者全部が開架制のアルコーヴに入ると、業務遂行に大いに痛手となる。したがって混雑時には入庫許可証を持つ利用者だけに書架へのアクセスを認めたが、許可証を持つ利用者は非常に多いと付言した。最後に(3)に関して、開架によって図書の利用は増大した。特に利用の少ない夏期の利用が増えたという。利用される図書の質については断言は難しいと述べてつ、利用者は目録で選ぶよりも、すぐれた本を選んでいるとの確信を示した。そして質の低い本を次第に撤退させ、住民に読ませたい本に置き換えていくとの意向を示した。最後にアクセスの自由を拒否できないと結論した。

時間が押しつまっていたこと、パットナムもブレットも大会に出席しておらず代読されたこともあって、意見を表明したのはデンヴァー公立図書館長ジョン・C. デイナ (John C. Dana) だけであった⁽²⁴⁾。図書館を住民の所有物と考え、図書と利用者との間の障壁を最小にすべきというデイナにとって、開架制は当然の措置であり、ミネアポリスの実践に賛意を表明した。デンヴァーはフィクションに開架を用いていないが、それはスペースが狭いためである。紛失本や切除は少なく2年間で40ドルから50ドル程度、書架の乱れも問題にするほどではなく、利用者数や利用冊数は増大し、読書の質も向上している。そして図書は神聖なものではなく、道具であり、使われることに意味があると結んだ。

1891年の状況をみると、ケンブリッジ公立図書館の理事ヒギンソンやブルックライン公立図書館の理事ソールなどが積極的に開架制を主張し、むしろ図書館員の方が開架制に慎重ともいえた。しかし1891年サンフランシスコ年次大会はブレットやパットナムに開架制を主張する大きな機会を提供することになった。そして初めて影響力のあるデンヴァー公立図書館長デイナがブレットやパットナムの主張を強力に支持したのである。

3 1892年、1893年：開架制支持への流れの形成

3.1 ブレット論文 (1892年11月)

1892年の年次大会はニュージャージー州レイクウッド (Lakewood) で5月中旬に開催された。開架制に的を絞った報告はなかったが、カレッジ図書館セクションで書架へのアクセスが話題になり、学生が研究主題のすべての図書を調べられることの重要性を主張する図書館員、学部学生には精選した蔵書を開架にする方が有効であると主張する

図書館員がいた⁽²⁵⁾。また全体会も書架へのアクセスに触れ、ブルックリン図書館のW. A. パードウェルは、新着図書から選んで利用者が自由に手に取れるようにし、成功していると述べた⁽²⁶⁾。続けて会長ウィリアム・I. フィッチャーは、カレッジ・セクションでも開架が取り上げられ、全体としては書架への最大のアクセスの提供が支持されていると報じた。とはいえプリンストン・カレッジの図書館長E. C. リチャードソン (E. C. Richardson) が釘をさした。同館では開架の実験をしたが、1年間に1,000冊の紛失本があり、開架を断念したという。過去1年半は入庫者には用紙に署名させ、いつ誰が書架にいたか確認できるようにしていると述べた。

ブレットは1892年11月号の『ライブラリー・ジャーナル』に投稿した⁽²⁷⁾。この論文はこれまでになくブレットの開架制にたいする考えを具体的に示している。まずブレットは、貴重書や利用されなくなった図書を閉架書庫に收容するのは何ら問題ではなく、開架制とはその他の本をすべての利用者が直接的に手に取れることをいうと定義した。ブレットによると、開架制は図書の保全という観点から反対されてきた。そして専門家や学徒だけに書架へのアクセスを認め、労働者などには認めない図書館がある。前者が息抜きに最新の小説を求めるのに書架へのアクセスを認め、後者が電気に関するテキストブックを求めるのに書架へのアクセスを認めないといったことが生じる。これらのブレットの説明は重要な意味を有する。まず開架制と閉架書庫が排他的でないとは定義づけたことである。1890年当時のクリーヴランドの場合、蔵書冊数は約4万冊で、フィクション以外の全蔵書を開架にしていた。そのこともあって、全蔵書（貴重書などは除く）の開架が、すなわち開架制と考えられたりしていたからである。次に利用者グループによって書架（書庫）へのアクセスの度合いを変えることに反対した。これは従来の大規模公立図書館での実践への批判である。それとともにミネアポリスでの開架制、少なくとも利用者規則の規定（特別な調べ事を行う利用者に入庫許可証を発行する）⁽²⁸⁾は、この論文で示されたブレットの考えとそぐわないことになる。

続いてブレットは開架反対論を取り上げた。書架の乱れや紛失本は理論的な問題ではなく、現場の問題で各館で相違する。また開架は多くのスペースを必要とするとの反対論については、閉架制のような大きな出納室は不必要であるし、利用されない本は閉架書庫に撤退させるので、必ずしも大きなスペースを必要とするとは言い切れないと主張した。一方、開架制にはいくつかの利点がある。職員による図書出納の労力と時間が完全に節約できるし、利用者は自分で書架に接するのを好んでいる。職員は特定の主題（アルコーヴ）を担当するので、その主題やアルコーヴに責任を持ち、秩序を保つ。また主題に精通するので、利用者によりよいサービスができる。

ブレットは上述の経済的利益とともに開架制の道徳的利益を強調する。閉架制は利用者を信頼しておらず、開架制は利用者を信頼している。この道徳的な意味の相違は非常

に大きい。利用者への信頼を示せば、それが濫用されることはほとんどない。閉架制での目録による検索を、大多数の読者は嫌がる。子どもや慣れていない人にとって目録は使いにくく、次第に図書館を利用しなくなる。一方、多くの図書を比較検討する利用者にとって、開架は大きな便宜をもたらす。両者の中間にいる人は、書架にアクセスできなくても、目録を通じて図書を入手でき、大して不満がないかもしれない。しかしいずれの範疇の利用者も開架制の導入で教育力を大いに高めることができる。開架によって、利用者は目的の本が本当に自分の求める本か否か、その場で確認できる。また関連する本、異なる視点の本を知ることになる。これは図書館の教育力が高まることを意味する。ブレットは図書の検討や比較という教育的価値を強調した。開架制はまさに利用者の自己教育に資するのである。

3.2 シカゴ年次大会と開架制への流れ

1892年から1893年にかけて開架制で最も重要なのは1893年のアメリカ図書館協会年次大会である。この年次大会はシカゴ世界博に合わせて、7月の中旬にシカゴで開催された。ホズマーは「利用者の観点からの図書館」を報告している⁽²⁹⁾。ここでは書架へのアクセスは意見が分かれているとし、アクセスを禁じる理由として3点を列挙した。すなわち、(1)盗本、切除、不注意な本の扱い、(2)書架の乱れ、職員の作業スペースの減少、(3)一般的な利用者は自分で図書を探すよりも、職員のサービスを受ける方がよいである。ホズマーは(1)について、盗本や切除は貧者や下層の利用者ではなく、教育ある人に多いとしつつ、概して盗本や切除は少なく、利用者を信頼できるとまとめた。(2)の書架の乱れについては、利用者に本を書架に戻さないように求めればよく、開架部門に必要なスペースの増大は閲覧室の縮小などで補える。(3)については、アメリカ人は自立志向で、各人が自分の好みを最もよく知っており、こうした考えを認めないと断言した。このように指摘して、アメリカでは開架制が急激に広まりつつあると結論した。

ホズマーの報告に続いて長時間の質疑応答があった⁽³⁰⁾。まず盗本や切除の危険性を問う質問者がいた。これにはブレットが、切除は開架制自体と強い結びつきはないと答えた。そしてクリーヴランドでの開架の実績を示した。3年間に貸出は20万冊から35万冊に増加し、紛失本は1年に300冊を超えず、その大半はフィクションや児童書といった安価な本である。ブレットによれば、開架制のために4人分の人件費2,000ドルが節約され、一方、支出として増えたのは紛失本の対価300ドルに満たないと結んだ。またポータケット公立図書館長ミネルヴァ・A.サンダース (Minerva A. Sanders) は14年間の開架の経験を踏まえて、2年前までは紛失本はほとんどなかったと述べた。しかしこの2年間は盗本があり、警察と協力して盗人を捜し出し、盗人の家には400冊の図書館の本があったという。この盗人は教養ある女性であった。サンダースは盗本は図書館が

信頼している階層の人物であると確認し、紛失本は1年に10冊未満と報告した。報告者のホズマーは、貸出は40万冊に達するが紛失本の比率は取るに足りないとは応答し、また切除はほとんどないと付言した。

デトロイト公立図書館長アトリーは、参考図書、芸術、建築などの本を開架にしていると報じ、参考図書が紛失し、後に書架に戻っていたという経験談を話した。要するに利用者は手続きをせずに借り出したのである。ロサンゼルス公立図書館長テッサ・L・ケルソー（Tessa L. Kelso）は、参考室の4,000冊を開架にしているが、蔵書印を各所に打つとともに、古本屋と連絡を取って、盗本を売却できないようにしていると報じた。その後、大学図書館などでの開架制と盗本についての実情報告が続いた。そのためホズマーがアクセスの自由で否定的な人の発言を聞きたいと述べた。これにイギリスのリヴァプール公立図書館長ピーター・カウエル（Peter Cowell）が反応した。カウエルの主張を一言で表現すると「治療よりも予防がまさる」⁽³¹⁾ということである。リヴァプールの参考室の入口で、利用者は守衛から用紙を受け取る。そこに必要な本を記入して職員に渡し、職員が本を手渡す。利用者が退室する時には、書名などが書かれた用紙と現物を提出する。このようにして盗本を防いでいる。その後も参考図書の扱いや盗本について意見の交換があった。

意見交換の流れを転換させたのは、コネティカット州ハートフォード公立図書館長にして児童サービスで有名なキャロライン・M・ヒューインズ（Caroline M. Hewins）であった⁽³²⁾。ヒューインズは同館では中道を採用していると主張した。カウンターに至近にすべての新着図書の書架、すぐれた小説の書架、すぐれた児童書の書架を配置し、利用者は完全に自由に手に取れると説明し、この措置は職員の時間の節約になると話した。また書架へのアクセスについては、特定主題を調べる利用者に許していると報じた。これは現実的な対応であった。増築や新築の機会がない既存の図書館は、出納室、出納カウンター、その後方に集密な書庫を配置しており、開架制の本格的な導入には大規模な改装が必要であった。それを避ける現実的な手立てとして、出納室に開架書架を置くという措置が講じられたのである。

ここでブレットが発言を求め、開架制の是非は未解決の最も大きな問題であると確認した。そして午前中のチャールズ・A・カッターの報告を取り出した⁽³³⁾。カッターの報告は、ボストン・アセニウムといった富裕者型の図書館と一般市民が利用するボストン公立図書館を比較したものである。カッターは両者の図書館の目的や主たる利用対象者の相違に触れ、アセニウムでは書架への自由なアクセスが可能なものの、大規模公立図書館では不可能と示唆していた。これについてブレットは、「書架へのアクセスの自由は、所有者図書館と公立図書館の利用対象者の性格によって異なるのか」と問題提起し、「絶対にそうではない」と声を高めた⁽³⁴⁾。また切除などは開架制自体と大して関係はないし、

立派な身なりの紳士による場合もあると事例を挙げた。さらに開架には広いスペースが必要との主張には、使われない図書、余った複本、時代遅れの図書などは閉架書庫に置けばよく、そうした書庫を開架スペースに隣接して配置すれば便利で、スペースが異常に広く必要にはならないと確認した。

ここで進行役のウースター公立図書館長にして参考サービスで有名なグリーンが、「若い図書館のミネアポリスやクリーヴランドが、利用者に全蔵書へのアクセスを認めるについて、上手に行っていることがわかる」と述べた。しかしそうした方式が完全に実用的とは言えないと発言し、ウースターの方式を説明した。特定主題の本をすべて見たい利用者の場合、職員が付き添って当該書架に行き、図書を選ばせ、そののち職員は利用者を研究者閲覧室に導き、そこで図書を閲覧させる。そして全利用者に書架へのアクセスを許すのが賢明とは思えないと結んだ。一方、ロサンゼルス公立図書館長テッサ・L.ケルソーは、書架への自由なアクセスを図書館実務の現実から不可欠とした。どのような貸出方式を用いても1時間に処理できる上限は250冊なので、開架にせざるをえないというのである。

この大会で指摘すべきは、1890年の時点と開架制に関する考えが変わってきたということである。1890年の『ライブラリー・ジャーナル』の調査では開架を否定したり疑問視する図書館長が多かった。それが1893年になると、正面から開架に反対したのはイギリスのリヴァプール公立図書館のカウエルであり、カウエルといえば1877年の第1回国際図書館員大会の時も開架制に反対していた⁽³⁵⁾。イギリスでは依然として閉架制と表示板 (indicator) の組み合わせが主流であった。しかしアメリカでは変化が生じつつあった。もはや開架制自体を頭から否定する図書館員はごく少数派になっていた。

4 1894年：開架制に関する大規模調査

4.1 開架制に関する大規模調査（概観）

1894年のアメリカ図書館協会年次大会は9月の中下旬にかけて、ニューヨーク州のレイクプラシッドで開催された。ブレットは「図書館の現在の課題」を報告し、南北戦争後の社会状況を踏まえつつ広範な問題提起を行った。ここでは「図書館の機能を十全に発揮するのにきわめて重大であるが、意見と実践について異論がある2つの問題」⁽³⁶⁾に簡単に触れた。2つの問題とは図書選択と開架制である。閉架制の主張者は意識の有無はともかく、図書の保存という中世の思想を抱いているとした。そして大量印刷の時代の図書の扱いと初版本や貴重書に必要な扱いとを区別できていないと論じ、最も制限の少ない方式が最善であると確認した。

この報告に力を得て、ホズマーが発言を求めた⁽³⁷⁾。ホズマーによれば、ミネアポリス

の方針の誤りを指摘する問いかけがあったという。ホズマーはこうした問いかけを断固拒否するとともに、全体的に図書館界は制限の撤廃に向かっているとの判断を示した。さらにホズマーはイギリスの図書館員が「利用者は内側、図書館員は外側」と主張していることを取り上げた⁽³⁸⁾。そして自館の児童コーナーでの実践を報告した。このコーナーは壁と低い柵に囲まれている。一方の柵の扉から子どもは入り、自由に書架の本を読み、本を選ぶ。そしていま一方の柵の扉が出口になり、そこに職員が常駐している。また一般の貸出カウンターの右端にも、柵で囲まれた部分があり新着図書を置いている。一方の柵の扉から入り自由に図書を選んで、いま一方の柵の扉から出る。この出口には職員がいて、貸出手続きを行う。さらにホズマーは新館が可能なら、大きな部屋をフィクションにあてて、開架にしたいと抱負を示した。要するにミネアポリスは寛大な許可制で書架（書庫）へのアクセスを認めていたのだが、児童と新着図書には完全な開架制を導入したことになる。そして貸出は50万冊に達するものの、紛失本の冊数や管理の点で大きな問題はなく、利点の方がはるかに大きいと結論した。

この大会の特徴は、イノック・プラット・フリー・ライブラリーのバーナード・C. スタイナー (Bernard C. Steiner) とサミュエル・H. ランク (Samuel H. Ranck) が、開架制についての調査の結果を報告したことにある⁽³⁹⁾。この調査は16の質問項目を用意し、アメリカを中心として、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど英語圏の135館に送付、105館から回答を得ていた。まずスタイナーは、「各図書館の実践はさまざまなので、調査結果を満足できる表にして提示するのは不可能」と書いた。したがって調査結果は全体的な解説と個別事例の紹介で構成され、後者は主たる回答館をアルファベット順に並べて説明している。

スタイナーによると、この調査で唯一の合意事項は、利用者は書架の定位置に本を戻さないということである。書架の乱れがないと答えたのは4館だけで、そうした図書館には理由があり、1つの館は厳格に書架に戻すことを禁じていた。また書架の乱れは頻繁に生じるが大した問題ではないと答える図書館、職員さえ位置をまちがえると回答した図書館もあった。大多数の図書館は一定の図書へのアクセスを制限し、また一定の時間にアクセスを許さない館もあった。特にフィクションと児童書についてはアクセスを拒否している図書館が多かったし、少なくとも忙しい時間はそうであった。参考図書の開架にはほぼ合意があった。

貸出部門を開架にしている場合、一般的にフィクションや児童書は開架にしていなくても、貸出の70パーセントから85パーセントはフィクションや児童書である。3つの図書館は開架によってフィクションの貸出比率が低下したと報告している。何らかの開架を試みたが中止したアメリカの公立図書館が5館存在した。27の図書館は書架へのアクセスに図書館長や図書館理事の許可を必要とする。この特権の与え方は各館によって相違

する。30の図書館は開架を採用せず、その理由はスペース不足、開架は不適、現在の建物では開架にできない、経費増大、十分な助力が提供できない、書架の乱れ、開架が可能とは思えないなど多様であった。クリーブランドは医学書や特別な図書を除いて、すべての人に全蔵書へのアクセスを認めていた。テキサス州ガルヴェルトン (Galveston) も全面開架で、年報などを調べると他にも全面開架の館があったという⁽⁴⁰⁾。

開架の場合、集密な書庫は使えず、また書架の高さも制限されるため、より広いスペースが必要である。開架制によって人件費を節約できるという回答もあれば、職員数が増加するとの回答もあった。人件費の節約がスペースの増大や紛失本の増加を埋め合わせるとの意見もあれば、利用者の満足度の高まりが人件費の増大と釣り合うとの意見もあった。大規模公立図書館の場合、書架の乱れをなくすのは大きな問題で、それに必要な経費、労力、時間は大変なものである。紛失本がかなりの冊数の図書館もあるが、重大な問題とは考えられていない。本の摩耗についても同様である。

スタイナーは回答を分析し、開架制の利点として(1)利用者へのサービスの向上(求める本が迅速に手に入る)、(2)管理の経済性(職員数の減少)、(3)利用される図書の向上を導き出した。一方、欠点としては(1)スペースの必要性(より大きな建物)、(2)書架の乱れ、(3)図書の紛失、(4)図書の磨耗、(5)管理費の増大(職員数の増大)、(6)開架エリアの混乱を指摘した。スタイナーは開架制が成功する2つの要因をまとめている。まず多くの利用者が混乱なく自由に動き回れる図書の配置である。次に利用者の性格で、誠実で注意深く、物を大切にするといったことである。これらは小さな図書館では充足しやすいが、各館が独自に対処しなくてはならない。そしてスタイナーは開架の導入によって良い結果が生まれる場合もあれば、そうでない場合もあると結論した⁽⁴¹⁾。

4.2 開架制に関する大規模調査(個別事例)と論議

以下では代表的な事例に限定して紹介する。まず開架を狭めた5つの公立図書館である。メイン州バンガー (Bangor, 蔵書36,408冊)は、2年半に500冊が紛失し、書架の乱れもあって1876年に閉架にした。ミズーリ州カンザスシティ (20,000冊)は、昨冬の数か月間、出納室のテーブルに新着図書を置き、利用者が自由に手に取れるようにした。しかし約30冊が盗まれ、この実験は成功しなかったという。マサチューセッツ州リン (Lynn, 49,000冊)は、3年間にわたって参考室の書架を開架にしていたが、15パーセントの本に汚損が生じた。一般利用者がフィクションや児童の書架に接することは認めがたいと断言した。続いてニューヨーク州ロチェスター (Rochester, 23,000冊)の場合、1892年まで利用者は書架にアクセスできたが、図書の紛失や書架の乱れが生じた。そのため書架やアルコーヴに柵を設けたものの、利用者から苦情はないと回答した。現在、利用者が自由に手に取れるのは百科事典や辞書である。最後にイリノイ州スプリン

グフィールド（Springfield, 24, 437冊）は、自由なアクセスのために多くの本を失い、その後は牧師にしか自由なアクセスを認めていないと回答した。

ニューヨーク州バッファロー図書館（73, 000冊）は、7年間にわたって約2, 000冊の参考図書あらゆる利用者の手に取れるようにしていた。そしてかなりの数の図書を調べ必要がある利用者には入庫を許可していた。いっそう多くの利用者を書架（書庫）に接するようにできるには、建物自体の問題があるし、全面開架が賢明か否かは疑問であると回答した。

ペンシルヴェニア州アレゲニーのカーネギー図書館（Allegheny, 26, 000冊）は、真面目な利用を求める利用者に入庫を許可していたが、フィクションは認めていない。既存の書庫では広範な開架制を導入できない。

回答館の中で、クリーヴランドのようなガラス扉の書架を用いているのは、ペンシルヴェニア州ブラドック（Braddock）のカーネギー図書館（10, 000冊）だけであった。主題でまとめた目録を展示していることになり、利用者に満足を与えていると回答した。またほこりから図書を保護し、表示板の役割も果たすので、職員の手間も省略できるのである。

オハイオ州コロンバス（20, 000冊）は、5年間にわたってアクセスの実験をしていた。ただしフィクションの書架、および土曜や忙しい時間はアクセスを許していない。図書館利用や職員への問い合わせは増加している。利用者は10回のうち8回は図書を誤った位置に戻す。紛失本や汚損などが目立って増えていることはない。

デンヴァー（20, 000冊）もフィクション以外を開架にしていたが、フィクションを開架にしないのはスペースが狭いためであった。

ニュージャージー州のジャージーシティ（Jersey City, 42, 051冊）は、ごく少数の場合、申し込みによって職員が付き添って書庫に導く。毎水曜日には書架の乱れがないか全蔵書を点検する。出納カウンターでは何冊でも閲覧に応じる。大多数の利用者は欲しい本を知っており、出納での遅滞は利用者には不利益を与える。

ミネアポリス（70, 000冊）の回答によると、同館は書架へのアクセスを意識して建てられたという。入庫許可証は図書館の本来の目的を持つ成人利用者に与え、1893年には1892年の2倍の許可証を発行した。フィクションのアルコールは利用の少ない時に開放している。利用者は本を書架に戻してはならない。紛失本は増えておらず、汚損はむしろ減少している。開架制に利点はあるが欠点はない。

ニュージャージー州ニューアーク（46, 319冊）の場合、2年前からフィクションを除いて開架にしているが、土曜日は混雑するので閉じている。開架を導入しても職員数に影響はない。利用者が書架に本を戻すが、書架の乱れは少ない。盗本や汚損が増えたわけでもない。

カリフォルニア州ストックトン (Stockton, 20,000冊) は、4年間にわたって美術書を除く全蔵書を開架にしていた。紛失本のために年35ドル必要だが、職員が1人減じるので年385ドルの節約になる。利用者は満足しているが、混雑、騒音、書架の乱れが生じている。フィクションと児童のための別途の部屋があれば好ましい。最も問題を起こすのは小説読者と児童である。

スタイナーとランクの報告には多くの意見や情報提供があったが⁽⁴²⁾、両者は大会に参加しておらず代読された。まず発言したのはブレットで書架の乱れは大した問題ではなく、1年間に人件費を3,000ドル以上節約できると述べた。必要なスペースの増大については、開架のアルコーヴ自体が利用者の活動スペースとして使えるので、気にするほどスペースの増大にならないと確認した。最後にクリーヴランドの4年半の実験について、貸出冊数は倍増し、もはや実験段階を終了したと報告した。

ミルウォーキー公立図書館のテレサ・H. ウェスト (Theresa H. West) は、書架へのアクセスの定義を問うた。具体的には書架にガラス扉をつけて施錠している場合、アクセスを提供していると言えるのかという問いかけである⁽⁴³⁾。ブレットはガラス扉について、ほこりから守るのに有効で、昼間は扉を開いたままにしていると答えた。さらにウェストは従来の開架制論議にない観点として、開架制を導入して職員に一定の主題を担当させると、当該主題への理解が深まり、専門家として利用者によりよいサービスができると発言した⁽⁴⁴⁾。これにはジョン・C. デイナがただちに反応した。この場合のサービスには、利用者の求めに応じた本を具体的に示して、それを読ませるという方向がある。いま1つは当該書架に連れて行き、自由に検討してもらおうという方向である。デイナは前者を拒否し、後者を好んでいる。こうしたデイナの主張にたいして、ペンシルヴェニア州スクラントン (Scranton) 公立図書館長ヘンリー・J. カー (Henry J. Carr) は、利用者は多様であり、ウェストやデイナの主張も含めて、各利用者にも最適な対応をすべきと取りなした。

コーネル大学図書館の参考図書館員ウィラード・H. オースティン (Willard H. Austin) の発言は、自館に関する報告だが、大規模公立図書館にも通用する内容であった。オースティンによればコーネルでは開架制論議はほぼ解決している。すなわち閲覧室にあらゆる主題のすぐれた本を置き、利用者は自由に手に取れるし、最新の精選図書が配置されていることを知る。そしてこの閲覧室で大多数の利用者の目的に対応できる。閉架の書庫にある本の利用者の大多数は専門家で、必要に応じて入庫を認める。

1894年のアメリカ図書館協会年次大会をみる限り、開架制への強固な反対論は消えていた。少なくとも公立図書館は開架を意識するようになってきていた。開架をどの程度に導入するかは合意はなかった。はっきりしているのは、開架にすると書架の乱れが生じること、それにフィクションを開架にしている公立図書館はほぼ皆無であったことで

ある。そしてフィクションを開架にしない理由として挙げられたのは、スペースの問題が多かった。

5 1895年から1898年：1897年第2回国際図書館員大会を中心にして

5.1 1895年、1896年：幕間

1895年はイギリス公立図書館での開架制論議と実践が紹介された。例えば1895年1月号の『ライブラリー・ジャーナル』には、ジェイムズ・D. ブラウン (James D. Brown) がイギリスでの開架制の状況と論議を紹介している⁽⁴⁵⁾。ブラウンの結論によるとイギリスでの開架制に関する全論議は、2つの要因から影響を受けている。まず保守的図書館員と利害関係業者、次に一般民衆への広範な不信である。アメリカの場合、「利害関係業者」という要因は存在しなかった。これはイギリス公立図書館で幅広く表示板が使われていたことによる⁽⁴⁶⁾。ブラウンはロンドンのクラークンウェル (Clerkenwell) 公立図書館で開架制を実施し、イギリスにおける開架制の最も声高な主張者であった。翌2月号は自館の実践を報告し⁽⁴⁷⁾、開架の利点を5つ指摘した。すなわち、(1)職員数が少なくてすみ経済的、(2)詳細な目録は不要、(3)職員が出納業務から開放され、よりよい利用者サービスが可能、(4)読書の質の向上、(5)開放的なため利用者が増えるである⁽⁴⁸⁾。

翌1896年の『ライブラリー・ジャーナル』も公立図書館の開架制に的を絞った論考や報告はない。この年のアメリカ図書館協会年次大会は9月の上旬にクリーヴランドで開催された。ここではニューアーク公立図書館長ヒルが「貸出方式」について報告した⁽⁴⁹⁾。ヒルの報告自体は開架制とは何ら関係はなかった。しかし後の意見交換でヒルは自館について説明した。ニューアークは書架へのアクセスを許している。この方式は図書を最も迅速に入手できるし、紛失本も50冊を超えない。開架制は売り出し中で、小規模館だけでなく大規模館でも将来性がある。このヒルの説明を受けて会長で議長のジョン・C. デイナが「開架制が持ち上がってきた。開架制について挙手をお願いしたい」と発言した⁽⁵⁰⁾。『ライブラリー・ジャーナル』は9月号でクリーヴランド年次大会の内容をまとめて報告した⁽⁵¹⁾。報告者は上述の採決について「クリーヴランド年次大会で最も重要な出来事」と評した⁽⁵²⁾。この報告によると出席者は約300人であった。最初の問いは、参考図書を除いて、開架制を採用している図書館、可能な限り図書への自由なアクセスを許している図書館か否かであった。各館の1人だけが挙手するように限定し、この問いを65人が肯定した。第2の質問は、書架へのアクセスの自由を認める人、可能なら開架制を導入したい人である。この問いには、「あたかも会場全体が1人の人間であるかのように、即座に全員が起立し、起立者の数を数える必要はなかった」という。最後に開架に消極的、否定的な人は12人であった。『ライブラリー・ジャーナル』の報告者は、

「この採決の結果は、たとえ3年前であっても生じないことであった」とまとめている。

5.2 第2回国際図書館員大会

1897年アメリカ図書館協会年次大会は6月下旬にフィラデルフィアで開催されたが、この大会で開架制が取り上げられた記録はない⁽⁵³⁾。この年には2回目の国際図書館員会議が7月中旬にロンドンで開催された。なお1回目の国際図書館員会議は1877年で、開架制は厳しく批判された。この1897年大会には600人以上が参加し、ブレットの報告「公立図書館での自由」がまさに開架制論議を扱っていた⁽⁵⁴⁾。まず開架制支持者も、貴重書や特別蔵書などに開架を主張してはいないと確認した。問題は一般利用者が関心を持つ蔵書である。この問題は、図書館の建物、備品、機器、管理運営に関係する。また図書館員を図書の保管人とするのか、利用者への役立つ助力提供者、親しみある案内者にするのかという問題でもある。

続いてブレットは経済性、教育的価値、道徳的影響を重視し、開架と閉架を比較した。経済面に関して、開架反対者はスペースが広く必要で、したがって高くつく主張する。しかしブレットは、開架制を導入しても思われるほどのスペースの増大にはならないと論じる。まず閉架制では広い出納室が必要だが、開架制の場合は大きな出納室は必要でない。また貴重書、余分な複本、利用されない図書などは閉架書庫に入れてよい。こうした措置は利用者に不利に働くのではなく、利用者が図書を探す助けとなる。このようにすればスペースの増大は妥当な範囲に収まる。備品や機器は開架や閉架で異なりはしない。サービス・コストは最も大きな検討事項だが、そこには書架からの取り出し、貸出、それに返却時の確認や書架の定位置に戻すことを含む。開架制の図書館では図書を取り出す時間は節約されるものの、書架の乱れが生じるので節約分が相殺されるかもしれない。ブレットは自館での経験に照らして、開架の方がサービス効率が良好とした。また重大な危険性として、盗本、切除、図書の汚損を指摘した。本の切除は開架閉架とは無関係である。いくつかの大規模公立図書館の経験によれば、紛失本は少なく、少額にすぎない。危険なのは貴重書を狙うプロの盗人で、ラベルや蔵書印がある一般書には関心を示さない。また盗本は教育ある利用者の場合が多い。こうした人物は制限的な図書館でも書架にアクセスできるが、そうした図書館は誠実な機械工のアクセスを拒否している。

次に教育面である。開架制の教育面を主張する人もいるし、閉架制での目録や職員の役割を重視する人もいる。開架制の主張者は何ら目録の使用や職員の助力を排除しておらず、閉架制主張者の前提が誤っている。また閉架制支持者は職員の助力提供を強調するのだが、実際には柵、カウンター、表示板を設けて、可能な限り利用者と図書との接触を避けている。開架制は閉架制と同じほど目録を使用できるし、職員にいつそう自由

で価値ある助力提供の機会を増し、さらに利用者に図書選択の権利を加える。すなわち閉架制支持者が主張する閉架制の利点は、すべて開架制に含まれている。職員はある主題に関心を持つ利用者と当該アルコーヴに在ること、閉架では提供できないすぐれたサービスを提供できる。また開架制の利用者は、関連主題の図書やいっそうすぐれた小説を手にするこゝで、読書の質が向上する。こうした読書の向上と幅の広がり、図書館員は援助できる。

道徳面に關連して、開架制は利用者への信頼を表明しており、こうした信頼感の表明を利用者は受け入れている。開かれた図書館は制限的な規則を最小限にするが、人間は信頼できないとの前提で規則を作成している図書館もある。そしてブレットは自館が閉架制に戻ることではないと断言した。また開架制の導入後に閉架制に戻した図書館に触れ、開架制自体の問題ではなく、特有な状況のためであると述べた。

ブレットは閉架制の主張者は開架の実践者にいないと述べ、一方、開架の主張者は開架の実践者であるとまとめた。アメリカの場合、10年前には大規模公立図書館での開架制は不可能と考えられていた。その後、開架制は次第に支持され、いくつかの大規模館と多くの小規模館で成功してきた。その結果、開架制を否定する人は少数派になると現状を報告した。最後にブレットは2点を訴えた。まず図書を正確に分類し配架すること、次にすべてを快適、魅力的にして、心地よく利用者を迎えることである。

ブレットの報告がアメリカでなされたなら、ほとんど異論はなかったであろうが、舞台はイギリスであった。イギリスの場合、ジェイムズ・D. ブラウンが開架制を実践して孤軍奮闘し、概して開架制への支持者は少なかった。そうした地で質疑応答に入ったのである⁽⁵⁵⁾。まずサルフォード（Salford）公立図書館の理事ウィリアム・W. ベイリー（William W. Bailey）は、「[ブレットは] 無政府状態を手放して賞賛しているように思える」⁽⁵⁶⁾と断言した。利用者は図書館利用に際して自分が求める本を知っている。もし自分の欲しい本をむやみに探すなら、それは図書館利用の訓練がされておらず、事前準備を怠っていることに他ならない。また開架制によって職員の仕事が減じるとは思えないし、開架制は図書館の価値、文化、地位を低下させ、図書館を教育のない人びとの掌中に帰する。ベイリーは、自分は全体として製造業地区の住民を大いに信頼しているが、労働者が開架部分に入れば、無秩序が生じ、図書館は混乱に陥ると述べた。続いて英領ギアナからの参加者が発言を求め、開架制導入はコミュニティの判断によるが、図書館全体を開架にするのは行き過ぎと述べた。

こうした開架反対論を受けて特許図書館からの参加者が発言した。特許図書館の利用者は求める特定の資料を知っているので開架にする必要はない。しかし公立図書館の場合、読みたい本を探す利用者が多く、その場合に必要なのは1つの大きな開架部門であって、必ずしも館全体を開架にする必要はない。そしてこの方式は大英博物館が実践して

いるというのである。続く発言者は開架制の問題を未解決の問題と述べた。この発言者の図書室は開架から閉架に移ったが、それは開架にふさわしい諸条件が整っていなかったため、適切な条件を備えての開架に賛成した。また開架反対者にたいしては、クラークケンウェル公立図書館の開架制を見学した後に発言すべきだと助言した。この発言を受けてマンチェスター公立図書館の理事長 J. W. サザーン (J. W. Southern) が立ち上がり、クラークケンウェルを見学したと報じた後、「開架制は一定の条件下では成功するだろうが、そうした条件がすべての図書館に備わっているのではない」⁽⁵⁷⁾と主張した。マンチェスターの場合、労働者が1日に400冊から500冊を利用する。その5分の4は午後6時から9時の間で、この時間に貸出返却が殺到する。この短時間に200人から300人の利用者が書架にアクセスするなら、ベイリーが指摘した無政府状態が生じ、開架は明らかに不都合である。しかし開架が常に不都合ということではなく、これはクラークケンウェルの実践で明らかである。サザーンの結論は、開架制は望ましいのだが、それは各館の状況によるということであつた。続いてノッティンガム職工学校の発言者は、サザーンが主張する一定の条件を説明する結果となつた。そこでは盗本を取り上げ、職員が図書館を統制できるように書架の配列を考えるべきと主張した。そして開架制を意図して賢明に構想された建物の場合、開架はうまく機能できるとまとめた。

ここでボストン公立図書館長パットナムが発言した。パットナムはクラークケンウェルの開架制を賞賛した後、開架に関する最も重要な問題として「開架に配置する本の種類」⁽⁵⁸⁾を指摘した。そして利用者を引きつけるために誘い水となるような図書を並べるのは論外で、ボストンでは高質の図書を配していると主張した。また特許は開架する必要がないとの発言については、ボストンでは開架にしていると報告し、そうした扱いは各館の状況によると結んだ。さらにピーターバラ (Peterborough) 公立図書館長 L. スタンリー・ヤスト (L. Stanley Jast) が、開架反対派が指摘する理由には新味がなく、開架支持者に訴えるものはないと切って捨てた。これについてハムステッド (Hampstead) 公立図書館長は、ヤスト自身も旧来の発言を反復していると論評した。そして閉架の分館には表示板があり職員1人で対応できるものの、開架にすれば増員が必要で、図書館費の現状からして困難と主張した。閉架制にして出納カウンターに新着図書を並べるという方式があると結んだ。

最後に議長が、開架制を導入するか否かは各館の状況によるとの考えに全面的な賛意を表明したのである⁽⁵⁹⁾。

おわりに⁽⁶⁰⁾

クリーヴランド公立図書館長ブレットは1890年3月にフィクションを除く全面開架を

実施し、それを5月号の『ライブラリー・ジャーナル』で報告した。その影響は大きく、ただちに同誌は主要公立図書館に開架について問い合わせた。その結果をみると大都市公立図書館長（その多くはアメリカ図書館協会幹部）は開架制に慎重であった。またフィクションを開架制にしている図書館はほとんどなかった。1891年になると州レベルの図書館員会議でも開架制が取り上げられるとともに、アメリカ図書館協会年次大会ではブレットとミネアポリスのパットナムが、実践にもとづく開架制の利点を強力に訴えた。

ところで1887年にポータケット公立図書館長サンダースが全面開架をアメリカ図書館協会年次大会で報告した時、図書館員からの積極的な支持はなかった⁽⁶¹⁾。最も評価をしたのは、ロードアイランドでの情報誌の発行者ライダーで1889年のことであった。また1890年3月にクリーヴランドが開架制を開始した時、早い時期に支持を表明したのは5月号の『ハーバース・バザール』で、執筆者はマサチューセッツ州ケンブリッジ公立図書館の理事ヒギンソンであった。さらに1890年のアメリカ図書館協会年次大会で開架制を強く主張したのは、大学教授ホズマーであったし、1891年のマサチューセッツ図書館クラブで開架制を主張したのは、ブルックライン公立図書館の理事ソールであった。このように図書館員でない人物が開架制に積極的で、図書館員は慎重な姿勢を続けていた。しかし1891年になってはじめて、影響力を持つデンヴァー公立図書館長デイナがブレットやパットナムを強力に支持し、これは開架制論議にとって大きな変化であった。

1892年、1893年の開架制論議は、ブレットとミネアポリス公立図書館長ホズマーを中心に展開された。そして1890年当時あるいはそれ以前とは、開架制にたいする態度が次第に変化していた。もはや開架制自体を否定する図書館員はごく少数派になってきていた。続く1894年には開架制についての大きな調査が実施され、その報告がアメリカ図書館協会年次大会で発表された。ここでも全体としてみると開架制への強固な反対論は消えていた。調査で明確になったことは、フィクションを開架にしている図書館はほぼ皆無であること、それに開架にすると書架の乱れが生じることであった。公立図書館は開架を意識するようになっていたが、どの程度にどのように導入するかに合意はなかった。それは各館の判断を重視するということでもあったろう。

そのためであろうか、1895年から1898年の時期、開架制についての議論は概して低調であった。この時期、開架制が正面から取り上げられ議論になったのは、1897年にロンドンで開かれた第2回国際図書館員大会であった。この大会でブレットは開架の経済面、教育面、道徳面を取り上げ、開架の利点を強く訴えた。しかし無政府状態を賞賛しているといった非難がイギリスの図書館員から出されたりした。イギリスでは依然として閉架制と表示板の主張者が多かったのである。この大会の結論は議長が総括したように、「開架制を導入するか否かは各館の状況による」というものであった。

このような経過を経て、アメリカでは開架制が受容されていった。既述のようにこの

期間を通して、貸出の大きな部分を占めるフィクションを大量開架している大都市公立図書館中央館はなかった。フィクションを開架にしない理由としては、スペースの問題、既存の建物の限界、図書館員の業務効率の低下、利用者へのサービス低下（カウンターを通じて請求された図書が所定の書架にない）といった理由が出されたりした。しかしながらこれらは現場各館の実務に関わる問題といえた。とはいえフィクションを含む大量開架には、各館レベルではなく、図書館界として検討すべき、少なくとも図書館界が関心を持つべきことがらもあった。それは1897年のロンドンでの国際図書館員大会で、ボストン公立図書館長パットナムが示唆していた「開架に配置する本の種類」である。いま1つ指摘すべきは、クリーヴランドもミネアポリスも開架制論議が生じる以前の建物、要するに開架制を視野に入れた建物ではなかったということである。この2点を明確に意識した図書館が、1897年に新たに公立図書館として開館したバッファロー公立図書館と1900年に新築開館したプロヴィデンス公立図書館で、開架制について新たな段階に達するのである。

注

- (1) 本稿は以下の2つの論文を前提としている。開架制についての研究の現状と研究の意義については「アメリカ公立図書館と開架制」を参照。川崎良孝「アメリカ公立図書館と開架制：開架制導入前史」『図書館界』vol.69, no.3, September 2017, p.170-185；川崎良孝「アメリカ大都市公立図書館での開架制の導入：クリーヴランドとミネアポリスを中心として」『図書館界』vol.69, no.5, January 2018 (近刊)。
- (2) William H. Brett, "The Rearrangement of the Cleveland PL," *Library Journal*, vol.15, no.5, May 1890, p.136-137.
- (3) "Access to Shelves," *Library Journal*, vol.15, no.7, July 1890, p.197-198. 取り上げられたのは以下の4館である。New York YMCA Library, Newark Free Public Library, Brooklyn Library, Detroit Public Library.
- (4) "Access to Shelves II," *Library Journal*, vol.15, no.8, August 1890, p.229-231. 取り上げられたのは以下の4館である。Worcester Public Library (MA), Minneapolis Public Library, Salem Public Library (MA), New Haven Public Library.
- (5) *ibid.*, p.230.
- (6) "Access to Shelves: II," *Library Journal*, vol.15, no.10, October 1890, p.296. 取り上げられたのは以下の2館である。Cleveland Public Library, Apprentices' Library (Philadelphia).
- (7) William E. Foster, "Classification from the Reader's Point of View," *Conference of Librarians, Fabyans, September 8-11, 1890. (Library Journal, vol.15, 1890)*, p.7.
- (8) William I. Fletcher, "The Popular Lighting of Library Rooms," *ibid.*, p.11.
- (9) James K. Hosmer, "On Browsing by Book-Worm," *ibid.*, p.33-37.
- (10) *ibid.*, p.37.
- (11) "The Minneapolis Public Library," *Library Journal*, vol.16, no.6, June 1891, p.176-179.
- (12) "Access to Shelves," *ibid.*, p.175.

- (13) “State Library Associations: Massachusetts Library Club,” *Library Journal*, vol.16, no.5, May 1891, p.142-144.
- (14) Thomas W. Higginson, “Women and Men: Libraries Opened and Half Opened,” *Harper’s Bazar*, vol.23, no.1, May 24, 1890, p.402.
- (15) “State Library Associations: Massachusetts Library Club,” *Library Journal*, vol.16, no.8, August 1891, p.252-253.
- (16) Thomas Wentworth Higginson, “Access to the Shelves,” *Library Journal*, vol.16, no.9, September 1891, p.268-269.
- (17) *ibid.*, p.268.
- (18) Charles A. Cutter and Paul L. Ford, *Library Journal*, vol.16, no.9, September 1891, p.263.
- (19) “Proceedings,” *Library Journal*, vol.13, no.9/10, September/October 1888, p.309-310.
- (20) William H. Brett, “Access to the Shelves in the Cleveland Public Library,” *Library Journal*, vol.16, no.12, December 1891, p.34-35.
- (21) Herbert Putnam, “Access to the Shelves: A Possible Function of Branch Libraries,” *ibid.*, p.62-67.
- (22) *ibid.*, p.66.
- (23) 書架への自由なアクセスの拡大というパットナムの方針を、必ずしも理事会は好意的にみていなかったようである。パットナムがボストンに移り、ホズマーが館長になった翌1892年に理事会は書架への自由なアクセスを縮減させている。“Report of the Librarian,” *Third Annual Report of the Minneapolis Public Library for the Year Ending December 31, 1892*, p.12.
- (24) “Proceedings,” *Library Journal*, vol.16, no.12, December 1891, p.108.
- (25) “College Library Selection,” *Conference of Librarians, Lakewood, N. J., Baltimore, Washington, May 16-21, 1892* (*Library Journal*, vol.17, no.8, August 1892), p.86.
- (26) “Proceedings,” *ibid.* 69.
- (27) William Brett, “The Open Library,” *Library Journal*, vol.17, no.11, November 1892, p.445-447.
- (28) “Regulations for the Use of the Public Library of Minneapolis,” *Hand Book of Minneapolis Public Library* (second ed.), Minneapolis, MN, L. Kimball, 1890, p.1-5.
- (29) James K. Hosmer, “Libraries for the Reader’s Point of View,” *Library Journal*, vol.18, no.7, July 1893, p.216-217.
- (30) “Proceedings: Access to Shelves,” *Conference of Librarians, Chicago, July 13-22, 1893* (*Library Journal*, vol.18, no.9, September 1893), C11-15.
- (31) *ibid.*, C13.
- (32) *ibid.*, C14.
- (33) Charles A. Cutter, “Proprietary Libraries and Their Relation to Public Libraries,” *Library Journal*, vol.18, no.7, July 1893, p.247-248; “Proceedings: Access to Shelves,” *op.cit.*, C10.
- (34) “Proceedings,” *ibid.*, C14.
- (35) [Peter Cowell], “Proceedings of the Conference of Librarians, London,” *Library Journal*, vol.2, no.5/6, January/February 1878, p.276.
- (36) William H. Brett, “The Present Problem,” *Library Journal*, vol.19, no.12, December 1894, p.7.

- (37) “Proceedings,” *ibid.*, p.158.
- (38) これはイギリスで開架制を実践したジェイムズ・D. ブラウンの論考を示し、以下に転載された。James D. Brown, “The Clerkenwell Open Lending Library,” *Library Journal*, vol.20, no.2, February 1895, p.51-54. また以下も参照。James D. Brown, “Open Libraries from a British Standpoint,” *Library Journal*, vol.20, no.1, January 1895, p.9-12.
- (39) Bernard C. Steiner and Samuel H. Ranck, “Report on Access to Shelves,” *Library Journal*, vol.19, no.12, December 1894, p.87-96.
- (40) *ibid.*, p.88.
- (41) *ibid.*, p.89.
- (42) “Proceedings,” *ibid.*, p.160-163.
- (43) *ibid.*, p.161.
- (44) ウェストはこの観点を新しいものと強調したが、例えば本稿で示したように1892年のブレット論文がこの点を指摘している。以下を参照。William Brett, “The Open Library,” *op.cit.*
- (45) James D. Brown, “Open Libraries from a British Standpoint,” *op.cit.*, p.9-12.
- (46) *ibid.*, p.12.
- (47) James D. Brown, “The Clerkenwell Open Lending Library,” *op.cit.*, p.51-54.
- (48) *ibid.*, p.53-54.
- (49) Frank P. Hill, “Preparing a Book for Issue: And Changing Systems,” *Library Journal*, vol.21, no.12, December 1896, p.51-56.
- (50) “Proceedings,” *ibid.*, p.148.
- (51) “American Library Association: Eighteenth Conference, Cleveland, September 1-8, 1896,” *Library Journal*, vol.21, no.9, September 1896, p.410-418.
- (52) *ibid.*, p.416.
- (53) “Conference of Librarians, Philadelphia, June 21-25, 1897,” *Library Journal*, vol.22, no.10, October 1897, p.1-194.
- (54) William H. Brett, “Freedom in Public Libraries,” *Transactions and Proceedings of the Second International Library Conference Held in London, July 13-16, 1897*, 1898, p.79-83. 『ライブラリー・ジャーナル』もこの大会の様態を報じている。以下を参照。“The Second International Library Conference, London, July 13-16, 1897,” *Library Journal*, vol.22, no.8, August 1897, p.391-398.
- (55) “Proceedings,” *Transactions and Proceedings of the Second International Library Conference*, *op.cit.*, p.243-246. イギリスでの開架制論議はこの時期でも激しく対立していた。以下を参照。““Open Access” in English Libraries,” *Library Journal*, vol.23, no.10, October 1898, p.577-578.
- (56) “Proceedings,” *Transactions and Proceedings of the Second International Library Conference*, *op.cit.*, p.244.
- (57) *ibid.*, p.244.
- (58) *ibid.*, p.245.
- (59) *ibid.*, p.246. なお1898年のアメリカ図書館協会年次大会ではフィラデルフィアのトムソンが開架制について報告し、自館での開架制および開架制全般を強力に主張している。John Thomson, “Report on Open Shelves,” *Library Journal*, vol.23, no.8, August 1898, p.40-42.

- (60) ここでは本稿に加えて以下の論文も視野に入れている。川崎良孝「アメリカ公立図書館と開架制」*op.cit.*, ; 川崎良孝「アメリカ大都市公立図書館での開架制の導入」*op.cit.*
- (61) M. A. Sanders, “The Possibility of Public Libraries in Manufacturing Communities,” *Library Journal*, vol.12, no.8, August 1887, p.395-400.

（かわさきよしたか。2017年7月25日受付
2017年10月17日採択）